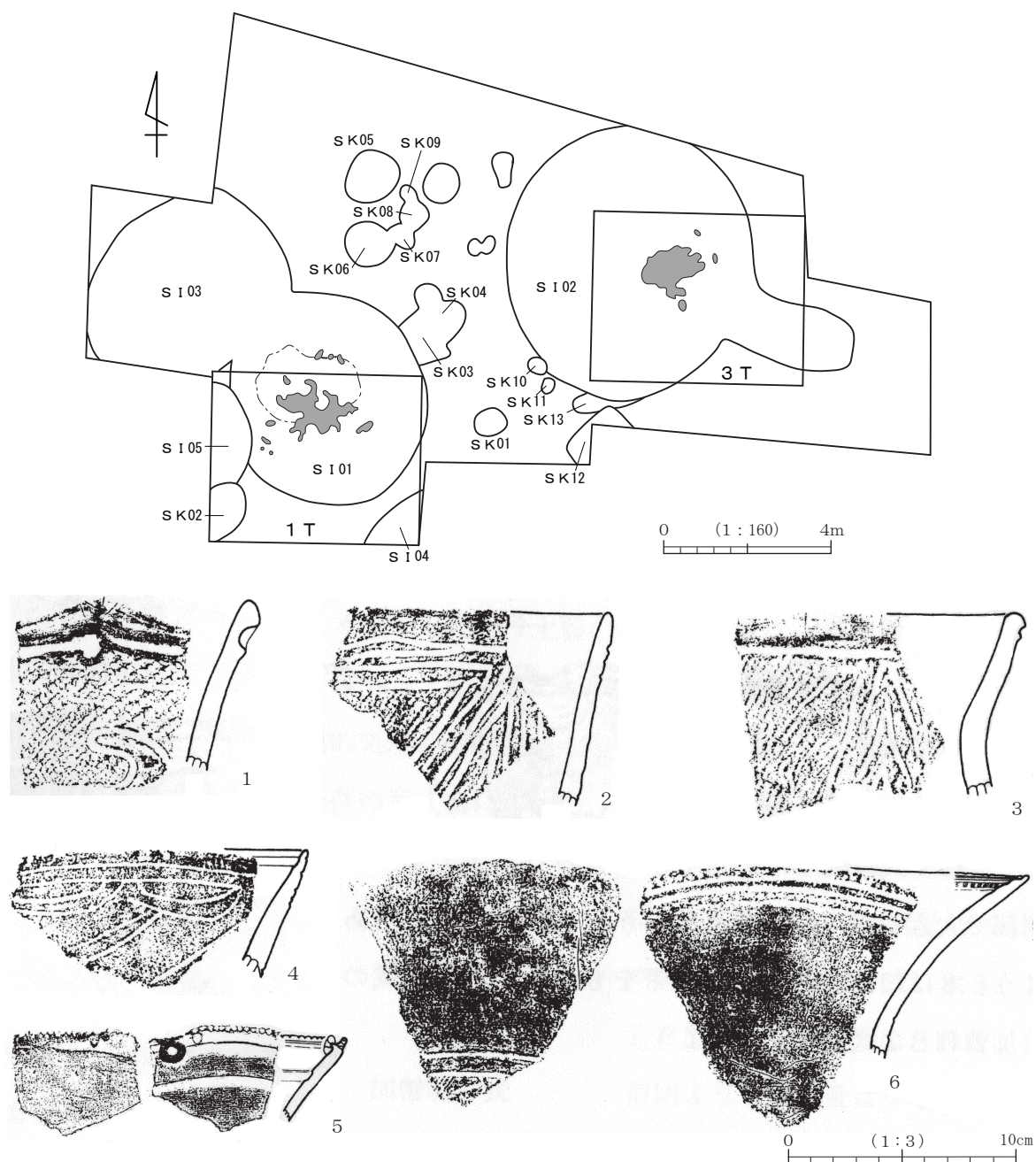


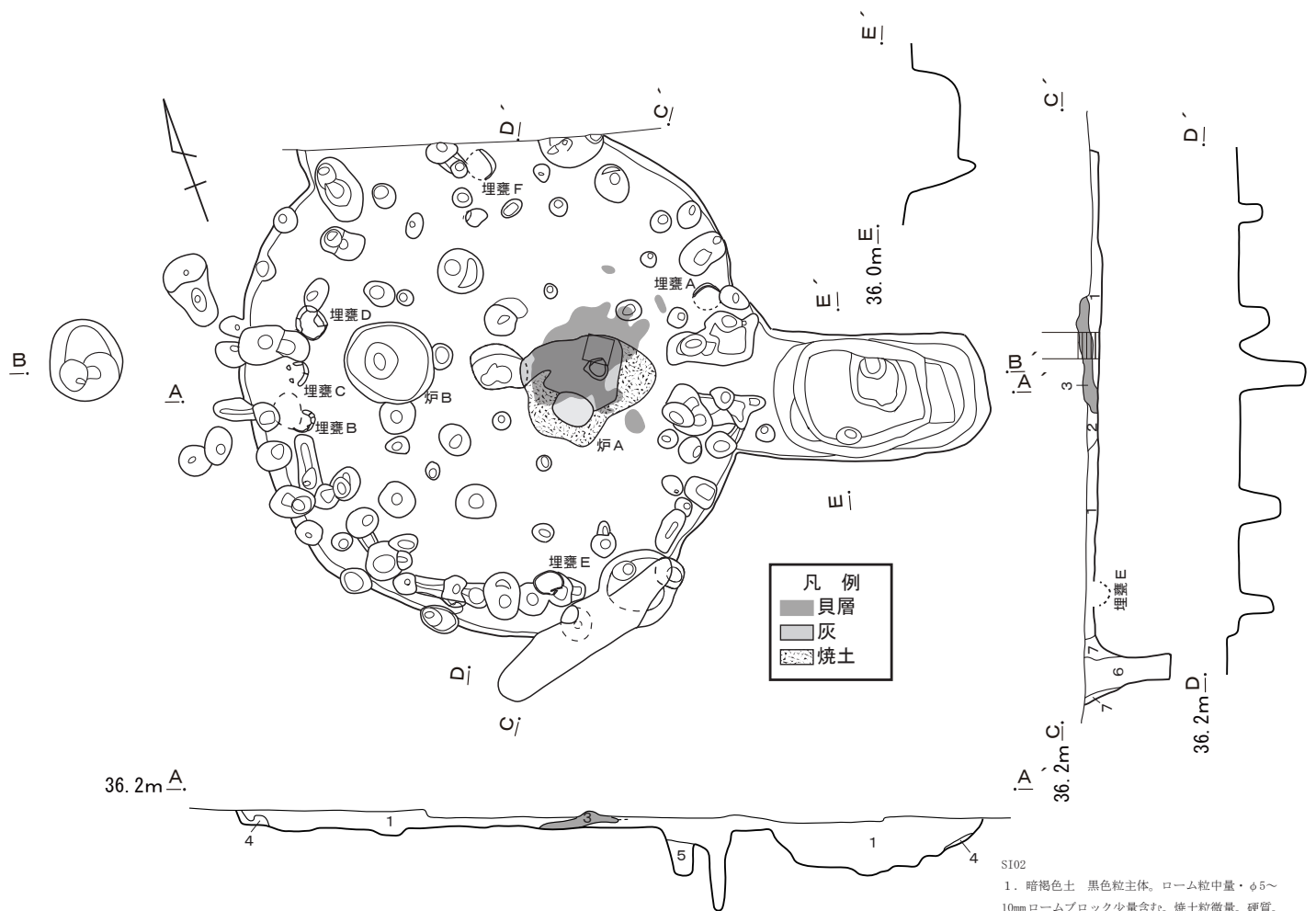
(1) S I 01 (第51図)

遺構平面プランを確認したのみで未精査である。

位置：J 13・14 グリッド東側境界で、北貝層と東貝層の間 形態：円形 規模：直径 4.84 m 重複：
S K 03 より新しく、S I 05 より古い 覆土：遺構プラン中央の直径 2.7 m の範囲で不整形の貝層の堆積
を確認 出土遺物：土器のみ出土した。堀之内 1 式土器が 3528.14 g、堀之内 2 式土器が 693.46 g、加
曽利 B 式土器が 33.97 g で、約 83% が堀之内 1 式土器となる。1～3 は堀之内 1 式である。いずれも深鉢で、
地縄文で垂下する沈線により施文される。4～6 は堀之内 2 式である。4 は深鉢で、5、6 は浅鉢である。



第51図 1・3トレンチ拡張遺構配置図、S I 01出土土器



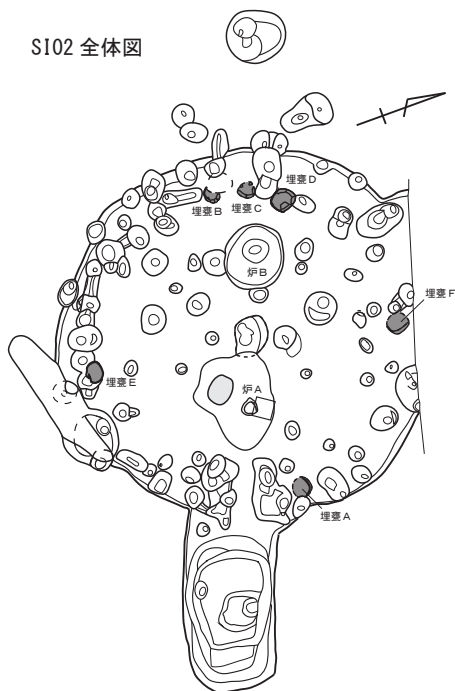
S102

1. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒中量・ $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ ロームブロック少量含む。焼土粒微量。硬質。全体を覆う土。
2. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒少量。焼土粒少量。炉の上部の土層。軟質。
3. 混土貝 混土率30% ハマグリ主体。サルボウ含む。
4. 明褐色土 ロームブロック主体。黒色粒少量。やや硬質。
5. 黒褐色土 黒色粒主体。ローム粒・ $\phi 3\text{cm}$ のロームブロック少量。軟質。埋戻し土。
6. 黒褐色土 黒色粒(粘性・しまりあり)主体。ローム粒少量。焼土粒微量含む。
7. 明褐色土 ソフトロームブロック主体。黒色粒・ローム粒少量含む。

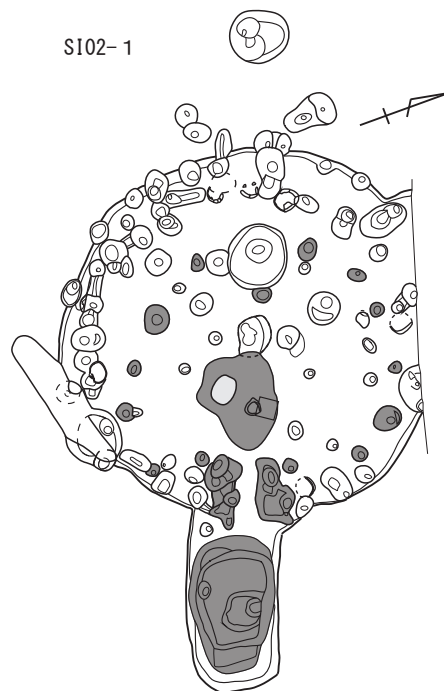


第52図 S I 02遺構実測図

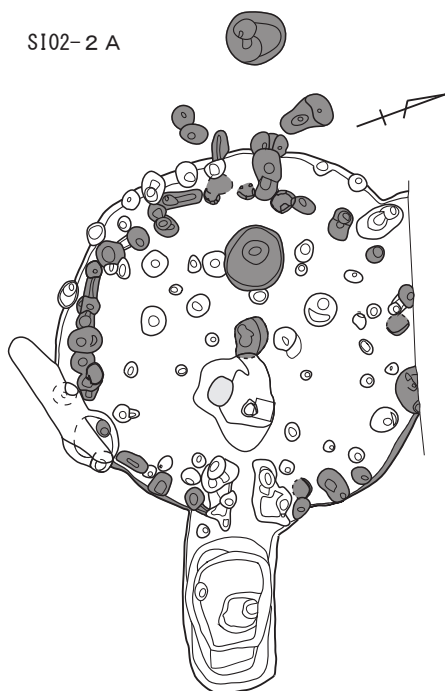
S102 全体図



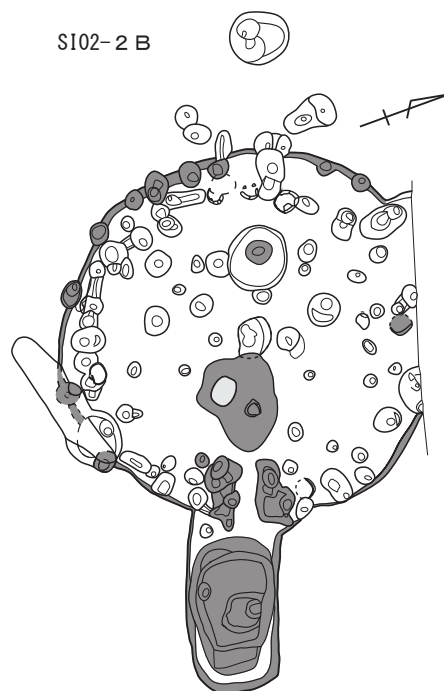
S102-1



S102-2 A



S102-2 B



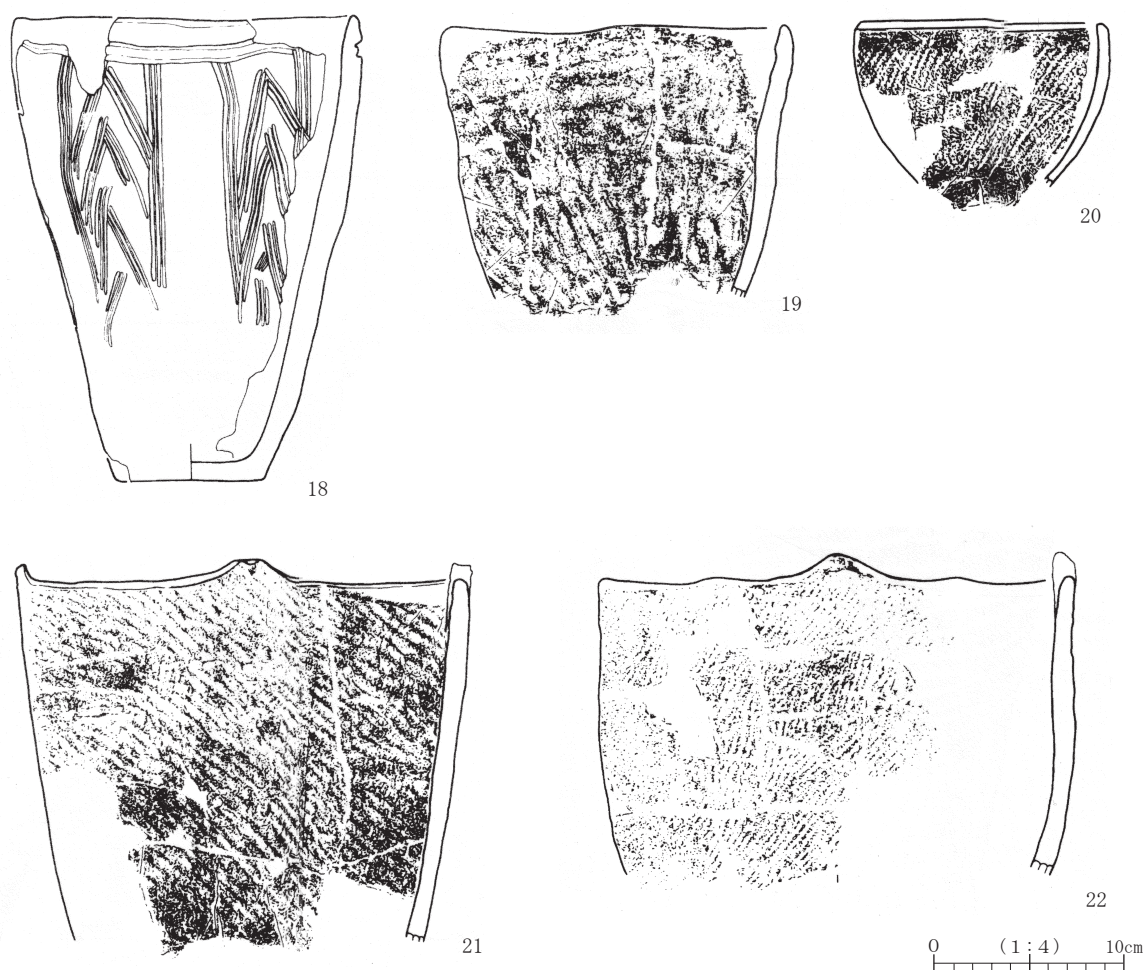
■ 該当ピット等

上守（1993）を一部改変

第53図 S I 02建替え想定図



第54图 S I 02出土土器 (1)



第55図 S I 02出土土器 (2)

(2) S I 02 (第52～55図)

遺構の保存状況の関係から、埋甕A～Fと炉A以外の精査と貝層サンプルの採取を実施し、精査後は将来の調査に備えて山砂を入れて埋め戻した。なお、本住居は、柱穴や埋甕、炉の配置から少なくとも3回の建て替えが行われているとされることから、それぞれS I 02-1、S I 02-2 A、S I 02-2 Bとし、以下1、2 A、2 Bとして記述する(上守1993)。

位置：K 13・14グリッドの境界で、北貝層と東貝層の間 形態：柄鏡形 規模：1 長軸7.10 m、短軸5.00 m。2 A 長軸8.20 m、短軸5.40 m。2 B 長軸8.60 m、短軸約6.00 m。深さは、円形部0.26 m、柄部0.66 m。1が最も小さく、2 A、Bが大きくなる。 主軸方向：1 N-66°-W。2 A N-146°-E。2 B N-66°-W。1、2 Bは南東方向に出入り口を有するのに対し、2 Aは出入り口が北西方向に反転する。 重複：北側調査区外で他の住居と切りあうようである。SK 13より新しい。 覆土：覆土上で重複する住居の前後関係を把握することはできなかった。円形部、柄部を含めて全体的に硬質な暗褐色土が堆積する。 炉：長軸上にA、B 2箇所検出された。炉AはS I 02-1、2 Bに伴う。長軸1.58 m、1.26 mで、未精査のため深さは不明。検出面で灰、焼土が検出される。上面で厚さ0.14 m程の貝層が堆積し、30×30×5 cm単位のコラムサンプルを5カット採取した。炉BはS I 02-2 Aに伴う。長軸1.02

m、短軸 0.90 m、深さ 0.12 m の浅い円筒形を呈する。埋甕：A～F 6 基検出された。未精査のため詳細は不明であるが、B～E が S I 02－2 A に伴い、A、F が S I 02－2 A・B のいずれかに伴う可能性がある。出土遺物：出土土器は、称名寺式 26.22 g、堀之内 1 式 40,430.74 g、堀之内 2 式 41.91 g、加曽利 B 式 188.57 g、粗製土器は縄文のみ 2,768.98 g で、ほぼ堀之内 1 式土器となる。掲載した土器はすべて堀之内 1 式となるが、古段階から新段階まで出土している。土器以外の出土遺物は、土製品が、土器片錘 9 点（第 78 図 1～6）、土製円盤 2 点（第 79 図 13、14）、石器が、石鏃 2 点（第 88 図 4、5）、二次加工ある剥片 1 点、打製石斧 1 点（第 89 図 22）、磨石 2 点、砥石 1 点、軽石製品 5 点である。

ほぼ同一地点で反復、拡張する 3 軒の住居の前後関係をみると、既刊報告書では S I 02－1 が最も古く、その後の前後関係については不明としている。調査時に柱穴の新旧関係の記載がないが、S I 02－2 A の出入り口付近において S I 02－2 A、B の柱穴が 2 箇所重複しており、その柱穴の深度をみるといずれも 2 B の柱穴の方が深い。また、2 B に伴う炉 A の直上に最終的に貝が廃棄していることから、2 A より 2 B の方が新しい可能性がある。各住居の詳細な時期については、埋甕と炉 A の精査をしていないことから不明であるが、最終的には堀之内 1 式期の新段階に廃絶されたと考えられる。

（3）S I 03～05（第 51 図）

いずれの住居も遺構平面プランを確認したのみで未精査である。

位置：J 13・14、K 13・14 グリッドに位置する 1・3 T 拡張部で検出された。形態：いずれも円形を基調とするが S I 03 以外は不明である。規模：S I 03 は確認された範囲の長軸で 5.12 m を測る。重複関係：S I 03 は S I 01 と重複するが新旧関係は不明である。S I 05 は S I 01 より新しい。出土遺物：S I 03 は堀之内 1 式土器が 3,200.88 g、堀之内 2 式土器が 89.10 g、加曽利 B 式土器が 152.53 g、S I 05 は堀之内 1 式土器が 26.33 g、加曽利 B 式土器が 3.33 g である。これらの住居が検出された 1・3 T 拡張部を含めて堀之内 1 式土器が主体的に出土する。

（4）S I 06（第 39～41 図）

遺構内の貝層確認面までと埋設土器の精査を行った。

位置：O 15・16 グリッド境界付近の 7 トレンチの南西側 形態：円形か 規模：検出範囲内の長軸 5.14 m 重複関係：なし 覆土：4～6 層の暗褐色土層が覆土となり、最下層にイボキサゴを主体とする 5 ブロックに分かれた混土貝層が堆積する。住居は 2 a 層の新期テフラ層に被覆される。埋設土器：第 39 図 2 を 2 つに打ち欠いた土器片とその他の土器片 2 片の合計 4 片を台として並べ置いて、その上に第 39 図 1 の深鉢を設置したような状況で検出された。出土遺物：出土土器は、称名寺式 33.06 g、堀之内 1 式 14,186.30 g、堀之内 2 式 109.95 g、加曽利 B 式 182.46 g、安行 1 式 70.48 g、安行 3 a 式 26.30 g、安行 3 b 式 21.32 g、粗製土器は、縄文のみ 8,779.81 g、縄文＋紐線文＋条線文 220.06 g、紐線文＋条線文 28.21 g、条線文のみ 454.39 g である。後期中～晩期前葉の土器がわずかに含まれるが、圧倒的に堀之内 1 式の土器が多く出土し、堀之内 1 式の埋設土器が出土していることから、同時期の住居と考えられる。1、2 は埋設土器に関わる土器である。1 は 3 単位の小波状口縁を呈する深鉢である。単節 R L を施文し、底部付近はミガキが密に施される。2 は縦位沈線間を斜位沈線によって連結する。3～9 は堀之内 1 式土器である。3、4 は頸部がやや屈曲する器形を呈するか。5～8 は朝顔形を呈する。9 は注口土器である。土器以外の出土遺物は、土製品が、土器片錘 3 点、土製円盤 1 点、有孔円盤 1 点（第 82 図 3）、石器が、剥片 3 点、石核 1 点、磨石 2 点、敲石 1 点、石棒 3 点、軽石製品 6 点である。埋設土器の時期より本住居は堀之内 1 式

期の新段階に相当すると考えられる。

(5) S I 07 (第46・47図)

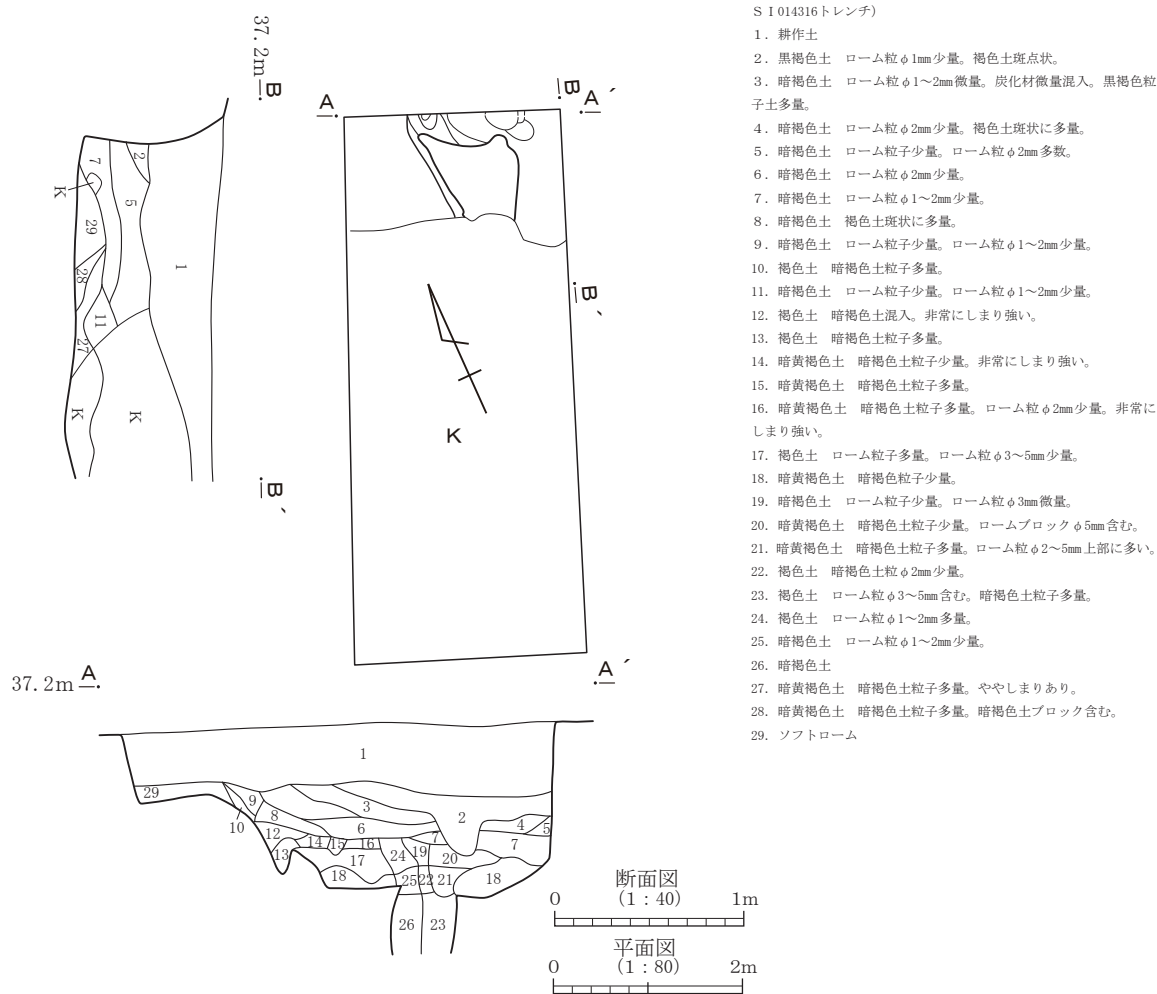
貝層が堆積しない範囲については床面まで、貝層堆積範囲についてはサブトレンチ内のみ精査を行った。
位置：J 20 グリッド西貝層南端の10 トレンチ 形態：不明 規模：不明であるが、本来はトレンチ範囲全体が住居の範囲の可能性がある。 重複関係：断面図で灰層をピットが切っていることから、少なくとも2軒が重複している可能性がある。トレンチ北側のSK 14より古い 覆土：2～8、10、11層が住居に関わる土層と考えられる。3層は硬化した床面である。6層は住居に伴う柱穴の覆土であり、5層の灰層を切っている。 炉：トレンチ中央部付近で検出された。長軸1.10 m以上、短軸0.99 mで、周縁部を中心に焼土が分布する。3層の床面に対応すると考えられる。 出土遺物：第2次調査時の2 c層の南側部分が住居からの出土遺物に相当するが、北側部分も含めて取り上げているため、両者を合わせた出土量を記載する。出土遺物は堀之内1式が507.37 g、堀之内2式が281.73 g、安行1式が7.77 g、粗製土器は縄文のみが579.69 g、縄文+紐線文+条線文が12.42 g、紐線文+条線文が25.90 gである。第7次調査で堀之内1式、堀之内2式の底部と思われる土器が出土しており、さらに堀之内式期のSK 14より古いことから、本住居も堀之内式期と考えられる。第47図28は堀之内1式の胴部片で住居の床面から出土した。縄文施文後蛇行する垂下沈線が施される。29は堀之内2式の深鉢の底部と考えられる。床面付近とP 3覆土最上層で出土した土器片が接合した。

(6) S I 08 (第44図)

床面に相当する部分まで精査した。サブトレンチ内では床面以下の調査も実施している。
位置：H 17 グリッド西貝層外縁部の4 トレンチ西側 形態：不明 規模：検出範囲内の長軸3.94 m、深さ0.12 m 重複関係：なし 覆土：4、5層暗褐色土が覆土で、2a層の新期テフラ層を切る。黒色土中に床面が形成されていることとなり、トレンチ北西部の床面で焼土が検出された。 出土遺物：出土土器は堀之内1式505.88 g、加曽利B式143.68 g、加曽利B 3～曾谷式172.45 g、粗製土器が縄文+紐線文+条痕文353.26 gである。層位関係及び出土遺物より、住居は加曽利B 2～3式期に形成されたと考えられる。第44図1～6は堀之内1式である。1は4単位の突起を有する堀之内1式の深鉢である。突起には貫通しない円孔文が施され、口縁部に1条の沈線が施される。口縁部以下は地縄文で縦位沈線が施される。7～12は加曽利B式である。8から10は加曽利B 2式の浅鉢と考えられる。8は口縁部に斜位条線を施し、頸部無文帯で胴部沈線区画内に縄文を施し、上側の沈線に沿って横位に連続する刻みが施される。9は胴部沈線区画内に横位条線が施される。

(7) S I 09 (第45図)

位置：J 19 グリッド西貝層貝層散布範囲の8 トレンチ 形態：不明 規模：検出範囲内の長軸3.72 m 重複関係：なし 覆土：2、2 c層の上層及びそれらを切り込むA～Eの貝、灰層がS I 09の覆土と考えられる。上層に堆積するA層はハマグリ、イボキサゴの破碎貝を主体とし、焼土粒、炭化物粒を含む。B層は焼土ブロック、被熱破碎貝を含む灰層である。C、D・E層はイボキサゴの破碎貝を主体とする貝層で、ピット内に堆積する貝層と考えられる。なお、P 2覆土上層にもC層からつながる貝層が堆積する。これらのことから1層耕作土によって削平された高いレベルに住居の床面が存在した可能性が考えられる。検出された6基のピットは柱穴の残欠と考えられる。 出土遺物：8 トレンチ出土遺物と区分して取り上げていない。堀之内1式土器が主体となり、堀之内1式期の住居と考えられる。

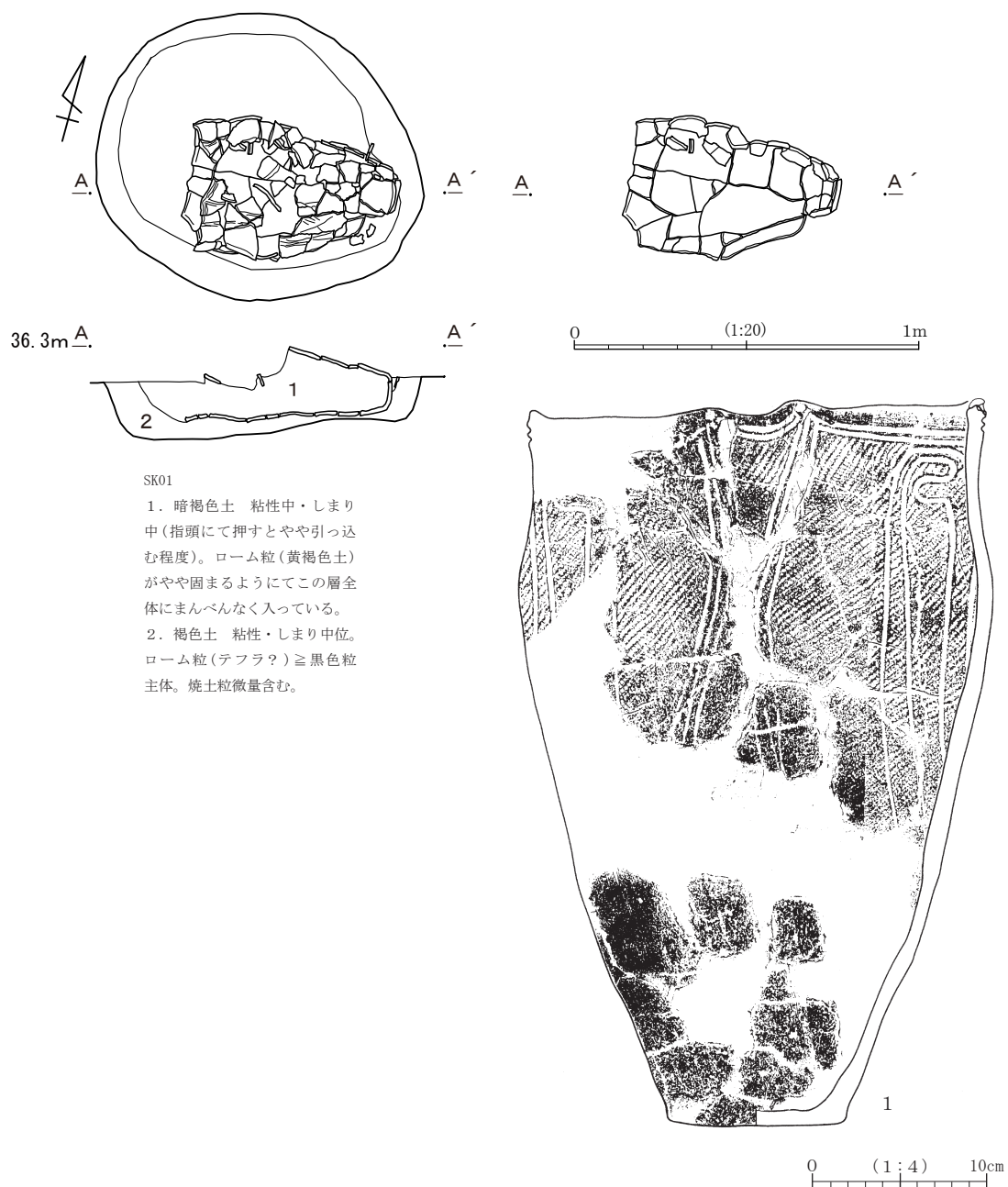


(8) S I 10～12 (第48・49図)

位置：J 15・16 グリッド東西北貝層の間の2トレンチ 形態：円形か 規模：S I 10は検出範囲内の長軸4.40m、S I 11は検出範囲内の長軸4.30m、S I 12は検出範囲の長軸4.58m 重複関係：S I 10とS I 11は重複するが新旧関係は不明 覆土：これらの住居が検出された断面の記録がないため不明 出土遺物：2トレンチ出土遺物は、後期前葉40%、後期中葉30%、後期後葉25%、晩期前葉5%である。点上げ遺物をみると、これらの遺構範囲から出土した遺物は加曽利B式期が多い傾向にあることから、住居も加曽利B式期に形成された可能性がある。

(9) S I 13 (第56図)

位置：H 19グリッド西貝層より西側の16トレンチ 形態：南側の大部分が攪乱を受けており不明 規模：検出範囲内の長軸0.82m 重複関係：なし 覆土：3～6、8～10、12、13層が覆土で、7、14、16層が床面、19～26層がピット覆土、17、18、27～29層が掘り方である 出土遺物：S I 13から後期前葉の土器が6点出土した。遺構外の16トレンチ内や攪乱土中からも遺物が出土しており、安山岩製の石皿(第92図53)も攪乱から出土したものである。出土遺物から堀之内1式期の住居と考えられる。



2 土坑

土坑は合計 21 基検出された。SK 01～13 は 1・3 T 拡張部で検出され、出土遺物からいずれも堀之内式期に形成されたものと考えられる（第 51 図）。SK 16～21 は 2 トレンチで検出され、出土遺物から SK 17 は安行 1 式期、SK 16、18～21 は加曽利 B 式期～後期安行式期に形成されたものと考えられる（第 48 図）。ここでは、精査を実施した SK 01・14・15 について記述する。

(1) SK 01 (第 57 図)

位置：1・3 T拡張部K 14 グリッド 形態：楕円形 規模：長軸 0.95 m、短軸 0.81 m、深さ 0.16 m
主軸方向：N－90°－W 重複関係：なし 覆土：1層は横倒しに埋設された土器内に堆積していた

暗褐色土層で、ローム粒が全体的に混入する。2層は横倒し土器の下層に堆積した褐色土層で、ローム粒主体で焼土粒を微量含む。出土遺物：確認面で堀之内1式中段階の埋設土器が検出された。深鉢が横倒しになった状態で検出され、確認面側の口縁から胴部付近は耕作により欠失していたが、土坑底面側は口縁から底部まで遺存していた。土器は、地文に縄文が施される4単位の浅い又状の突起が貼り付けられる小波状口縁を呈し、又状の両頂点の外面に円孔文が施され、円孔文間に口縁に沿った沈線が施文される。両頂点下には3条1対の沈線が垂下する。波頂部間は口縁に沿って2条の沈線が施文され、中間部分に蕨手状の垂下沈線が施文される。出土土器の状況から、本土坑は堀之内1式期中段階の墓坑の可能性はある。

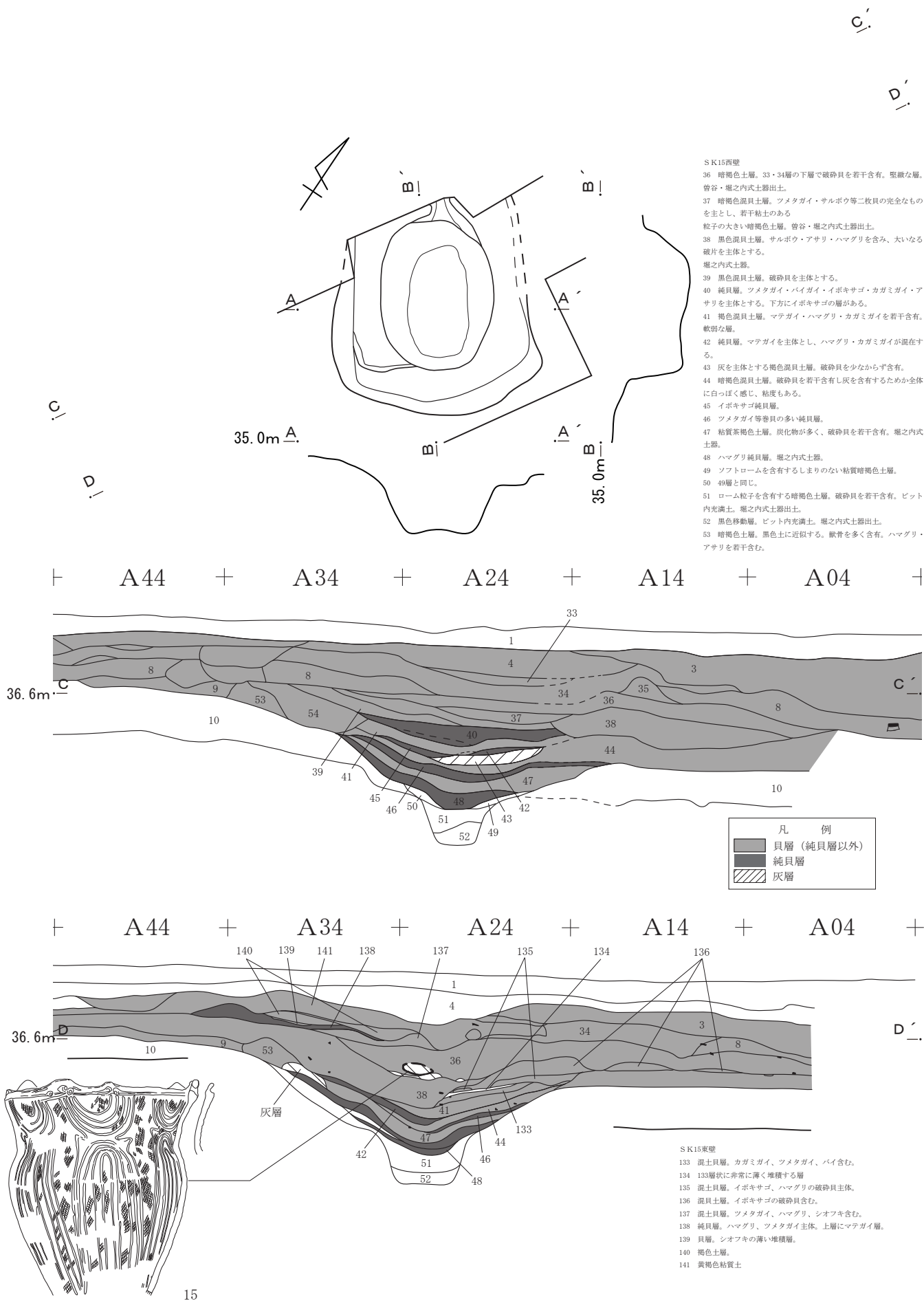
(2) SK 14 (第46・47図)

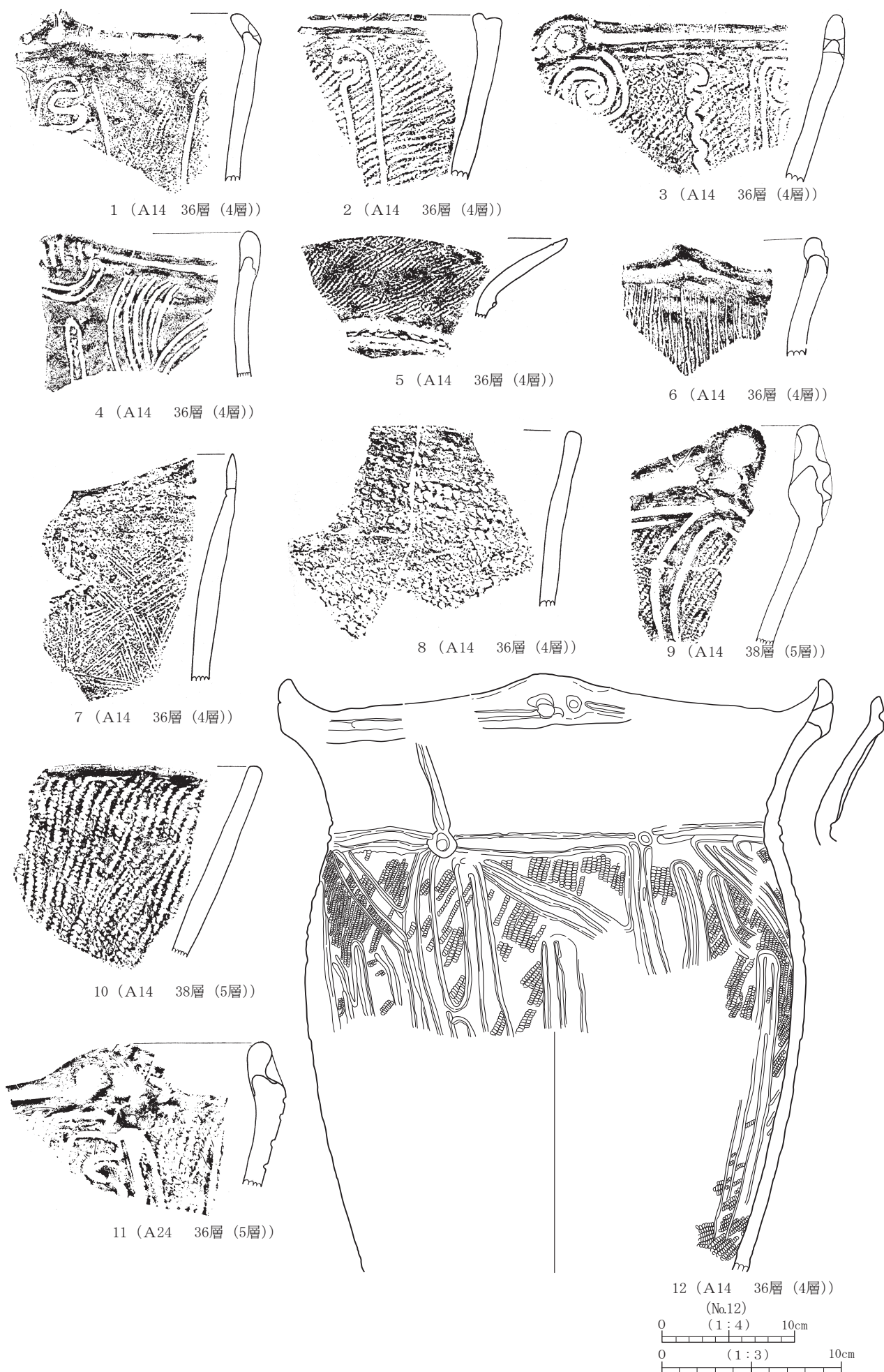
位置：J 14 グリッド10 トレンチ北端 形態：不明 規模：検出された範囲での長軸1.45 m、深さ0.26 m 主軸方向：N-35°-E 重複関係：南側に位置するSI 07より新しい 覆土：13、14層がSK 14の覆土となる。13層はハマグリ、シオフキの破砕貝を主体とする混貝土層で、上層の12層と比べると貝の含有量が著しく少ない。14層はシオフキ主体の貝を含む混貝土層である。出土遺物：最下層の14層からは加曽利E IV式36.26 g、堀之内1式166.82 g、堀之内2式29.62 g、粗製土器は縄文のみ84.14 gが出土した。第47図18は加曽利E IV式、19～23は堀之内1式、24は堀之内2式、25は縄文のみ施文される。土器以外の出土遺物は、イモガイ製垂飾が1点(第102図15)出土した。出土遺物と重複関係から本土坑は堀之内式期と考えられる。

(3) SK 15 (第9・58～62図)

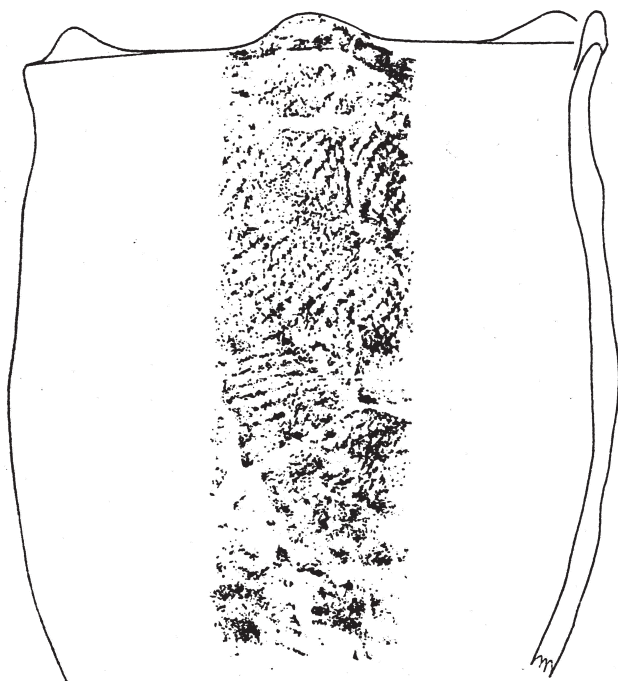
本土坑は第1次調査時にピットとして報告された遺構である。規模、形態から土坑として新たな番号を付番して報告する。

位置：M 16 グリッド、第1次調査A 14、24、34 グリッド(第9図)。北東から入り込む浅い谷の南から北へ傾斜する部分 形態：平面形態は、最上段が隅丸方形、中段以下が楕円形を呈する。北西側には溝状の落ち込みがみられる。断面形は中央部がやや高まる逆台形を呈する。 規模：残存長軸2.36 m、短軸2.14 m、深さ0.77 m 主軸方向：N-35°-W 覆土：西壁36～54層、東壁36、38、41、42、45～48、51～53、133～136層がSK 15の覆土に相当する。覆土最下層には貝層をほとんど含まない土層が堆積する。その上層に0.05～0.24 mの厚さの純貝層及び灰層と混貝土層が互層となってレンズ状に堆積する。純貝層は下からハマグリ主体(第48層)、ツメタガイ等の巻貝主体(第46層)、イボキサゴ主体(第45層)、マテガイ主体(第42層)、ツメタガイ、バイ、イボキサゴ、カガミガイ、アサリを主体(第40層)とそれぞれ主体となる貝が異なる。また、純貝層に挟まれる混貝土層には破砕貝が多く含まれる。第43層の灰層中にも破砕貝が少なからず含まれる。純貝層と混貝土層の互層上の覆土最上層に相当する第36層の底面からは第60図15の堀之内1式の大形深鉢が横位で検出された。土器内には灰が充満しており土器設置面にも灰層が形成されている。土器内の灰層についてはサンプルが採取されているが、今回分析は行っていない。また、同じく第36層のA 04・05・14・15 グリッドの境界付近のA 14 グリッドから第59図12が逆位で出土した(図版10-4)。これらの土器出土状況から、SK 15が埋没した最上面で何らかの行為が行われたか可能性が考えられる。 出土遺物：出土土器は、堀之内1式45,618.99 g、堀之内2式436.90 g、加曽利B式226.12 g、安行1式331.56 g、粗製土器は縄文のみ6,660.77 g、紐線文+条線文240.00 g、条線文のみ93.60 gであり、堀之内1式土器が圧倒的に多くなる。遺物はA 14、24 グリッド出土遺物をグリッド、層位ごとに掲載した。第59図1～10、12はA 14 グリッドの第36、38層から出土した土器である。いずれも

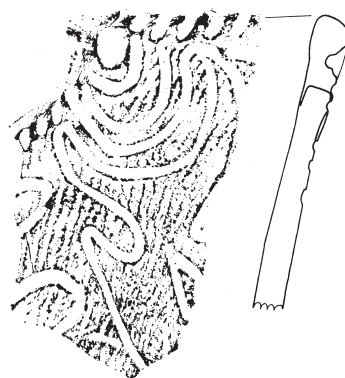




第59図 SK15出土土器 (1)



13 (A24 36層 (5層))



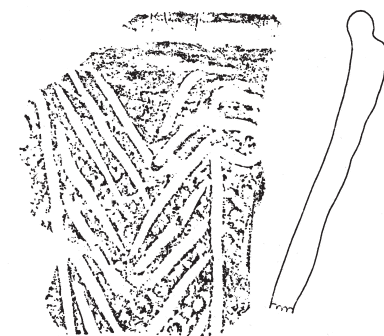
14 (A24 36層 (5層))



16 (A24 37層 (6層))



15 (A24 36層)



17 (A24 37層 (6層))

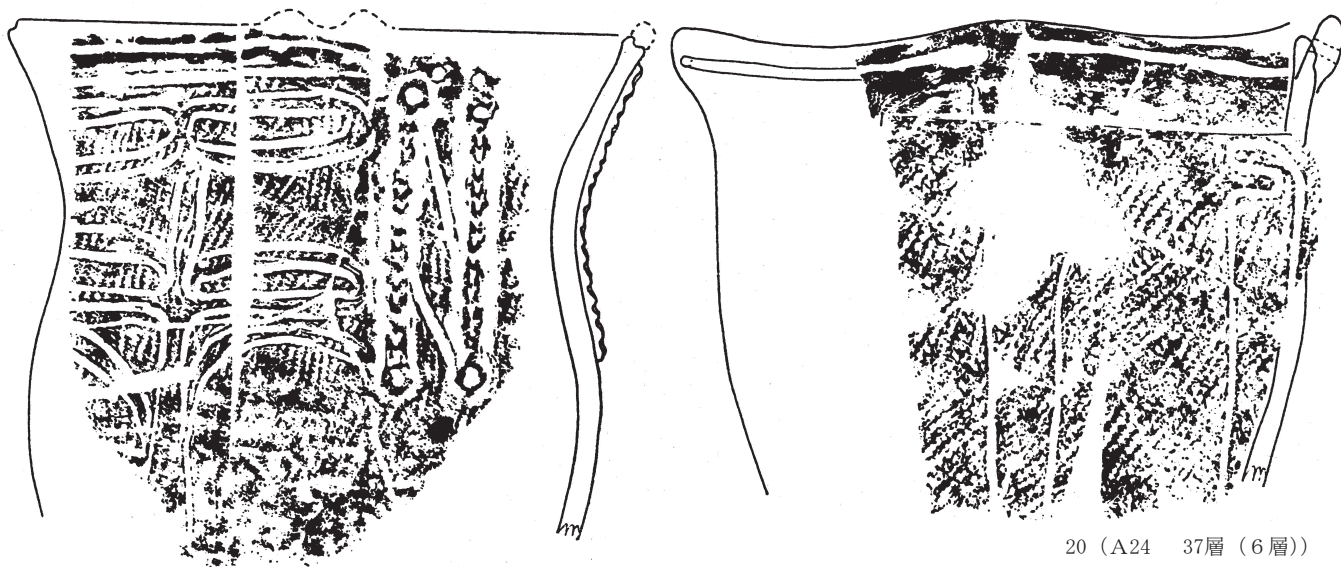


18 (A24 37層 (6層))

(No.13・15)
(1:4)

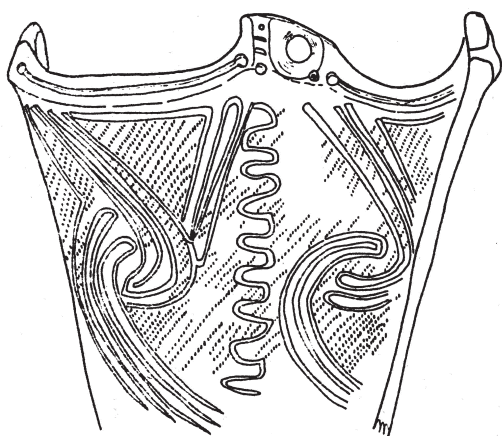
0 10cm
(1:3)

第60図 SK15出土土器 (2)



19 (A24 層位不明 (6層))

20 (A24 37層 (6層))



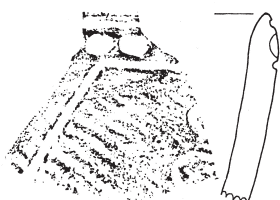
21 (A24 37層 (6層))



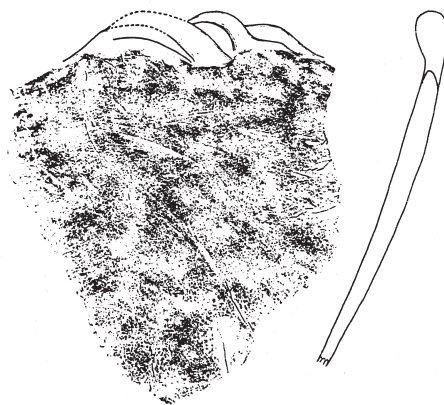
22 (A24 37層 (6層))



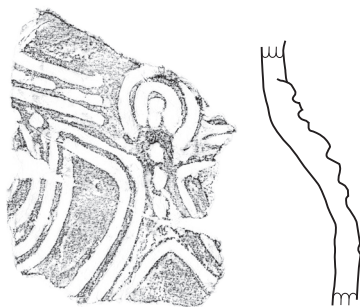
23 (A24 41層 (10層))



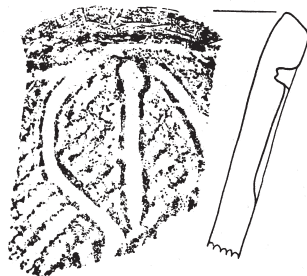
24 (A24 41層 (10層))



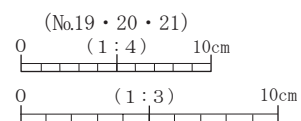
25 (A24 41層 (10層))



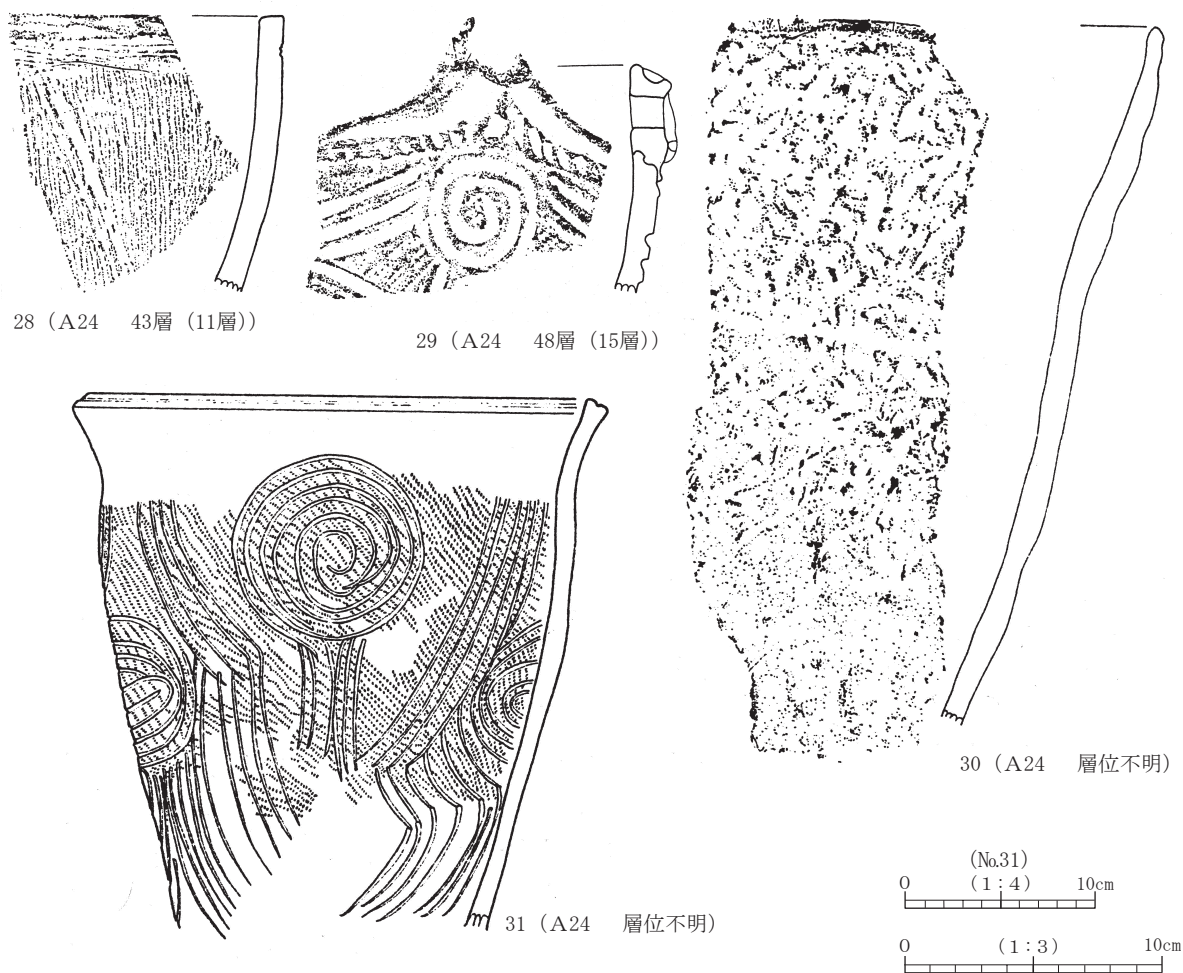
26 (A24 41層 (10層))



27 (A24 43層 (11層))



第61図 SK15出土土器 (3)



第62図 SK15出土土器 (4)

堀之内1式である。12は3単位の小波状口縁を有すると考えられる深鉢である。推定口径が40.5cm、残存器高が45.3cmで、口縁部の大部分と胴部以下の大半は欠損する。波頂部には穿孔と未穿孔の円孔文が施され口縁に沿って1条の沈線が巡る。口縁部から頸部屈曲部までは無文となり波底部に縦位に粘土紐が貼り付けられる。頸部以下は地縄文で縦位沈線間を斜位に連結する沈線が施文される。第59図11、第60図13～第62図31はA24グリッド出土土器である。上層の第36、37層で復元可能な個体が多く出土している。13は3単位の小波状口縁を有する深鉢で全面に縄文が施される。15は前述した灰が充満し横位で出土した土器である。底部以外の全周のおよそ2/3が遺存する。3単位の浅い又状の小波状口縁を呈する深鉢で、突起部には円孔文が施される。口縁に沿って1条の沈線が巡り、口縁以下は地縄文となり、波頂部下の頸部に下に突の4条の弧線文が施文され、頸部以下に上に突の上下に長い弧線文が同じく4条施文される。これらの弧線文の両外側にやや蛇行する沈線が縦位に施文される。同様の文様が波頂部間にも施文される。19は口縁部に小突起を有したと考えられる深鉢で、地縄文で横位楕円形や縦位沈線や縦位の貼り付けが施される。20は小波状を呈する深鉢である。口縁部が無文帯となり頸部以下地縄文で蕨手状の沈線が垂下する。21は4単位の波状口縁を呈する朝顔形の深鉢である。波頂部下に蛇行沈線が垂下し、波頂部間に入り組み沈線が垂下する。31は地縄文で渦巻き状の沈線や垂下する沈線が施文される。土器以外の出土遺物は、土製品が土器片錘1点、土製円盤1点、蓋状土製品(第80図6)、二次利用土器片(第83図2-1)、石器は磨石2点、

砥石 1 点、石棒 2 点、骨角歯牙製品はヤス状刺突具 1 点（第 98 図 14）、筥状製品 1 点（第 99 図 24）、加工歯牙 1 点、貝製品が貝刃 2 点（第 102 図 4、9）である。覆土最上層より第 59 図 12、第 60 図 15 の堀之内 1 式土器古段階～中段階と考えられる遺存の良好な土器が出土していることから、本土坑は少なくとも堀之内 1 式期中段階以前に機能していたと考えられる。

3 埋葬人骨（第 63・64 図）

東京大学総合研究博物館には、昭和 39 年に発掘調査によって出土した人骨（標本番号 UMUT130848）とその前年の昭和 38 年に発見され同博物館に持ち込まれた人骨（標本番号 UMUT130847）2 体が所蔵されている。東京大学総合研究博物館に「保存資料」として保管されている昭和 38 年の人骨発見時のスケッチ（昭和 39 年発掘調査成果も含む）と、昭和 39 年発掘調査時のコメント、昭和 38 年に人骨を発見した発見者からの聞き取り調査をもとに推定した人骨発見場所及び発見状態と各保管人骨と一緒に収納されていた土器について記述する。なお、人骨の分析については第 4 章第 4 節に掲載する。

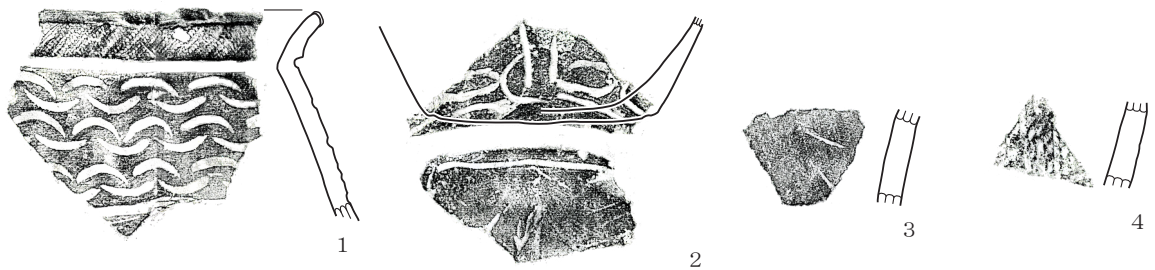


※断面図の数値は深さを示し、単位はcm

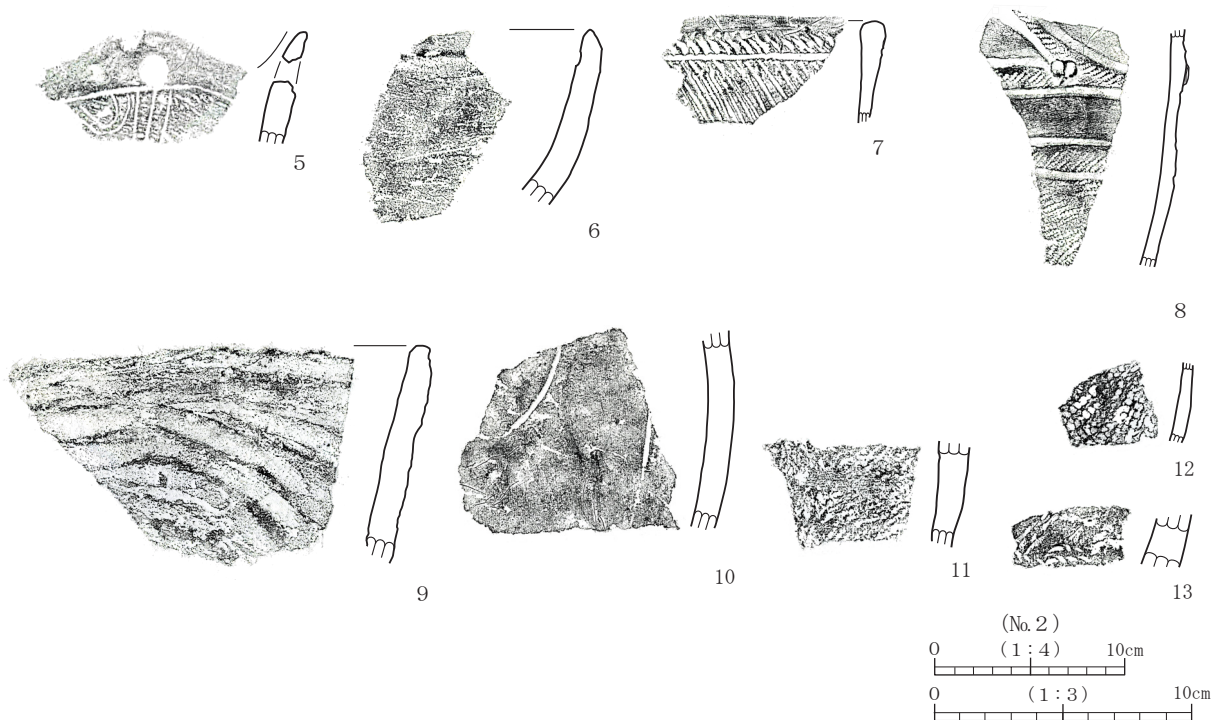
第63図 昭和38、39年人骨発見時模式図

位置：K 19 グリッド、西貝層貝層散布範囲南東端の市道際 出土状況：第 63 図は、昭和 38 年人骨発見時のスケッチをもとに出土状況を模式的に示したものである。発掘調査時のコメントによると、「飯富貝塚 場所 千葉県君津郡袖ヶ浦町字飯富の台地 道路をはさんで北側が貝塚、南側の道路の傍に人骨が発見された。同所には貝が殆んどない。北側は畠、かなり広い範囲に貝が散布。但し塊状に分散。南側は樹齢 15 年位の松林。地表はささ、すすきの類によりやぶ状である。人骨は大黒氏発見によるものであるが、1 個所に集中し、地表下 5cm 位であって、しかも頭は道路にあり破損甚しく、またささの根によって分断されている。1964. 2. 6 遠藤」（水嶋他 2006）と記載されており、人骨は市道側の北西方向に頭を向けた仰臥伸展葬の状態で発見されたようである。また、昭和 38 年に人骨を発見した方を伴い現地調査し、第 63 図の位置から発見されたことを確認した。断面図をみると地表面直下の黒色土中から発見され、人骨の直下はローム層となっており、ローム層までは掘り込まれていなかったようである。発掘調査時の出土状況を示すスケッチに比べて、現在保管されている人骨の部位が少ないように感じるが、これまでの山野貝塚の調査において唯一埋葬状態で発見された人骨であり、集落の墓域を考える上で重要な資料である。なお、保存資料のスケッチ上に記載された調査遺跡名が「飯富貝塚」となっているが、同じく保存資料とされる 1/50,000 の地図上では現在の山野

標本番号 130847 と一緒に入っていた土器



標本番号 130848 と一緒に入っていた土器



第 64 図 昭和 38、39 年発見人骨（標本番号：130847・130848）と一緒に入っていた土器

貝塚の位置で調査したことが示されている。出土遺物：人骨収納ケースと一緒に収納されていた土器について実見し、土器についてはすべて実測し掲載する。ただし、これらの遺物が入骨と供伴していたかは不明である。第64図1～4はUMUT130847の収納ケースに収納されていた土器である。第64図1は安行3b式の深鉢あるいは広口壺と考えられる。口縁部帯縄文で、口唇部にB字状の突起が貼り付けられる。頸部に1条の沈線が巡り大きく屈曲する。頸部以下の胴部上半には上下に互い違いで3段の弧線文が施文される。2は安行3a～3b式と考えられる角底土器の底部である。底面に縁辺に沿って隅が途切れる沈線が施される。外面には沈線による入り組み状の文様が施文される。3、4は無文部分の土器片である。4は割れ口も含め全面に灰が付着する。5～13はUMUT130848の収納ケースに収納されていた土器である。5は堀之内1式の深鉢の口縁部である。波状口縁を呈し、波頂部に穿孔が施される。口縁部に横位沈線施文後、沈線下に縄文、沈線の順に施文する。2は無文の土器の口縁部で、外面は横位のケズリが施され、内面には1条の沈線が施される。堀之内1式か。7は後期安行式期の粗製土器の口縁部である。斜位条線、横位沈線、口縁部刻みの順に施文される。8は波状口縁を呈するであろう安行3a式の深鉢の頸部～胴部である。9は無文の深鉢の口縁部で、外面に斜位のナデが施され、外面と断面の一部に炭化物が付着する。10は深鉢の胴部で外面に斜位、縦位の沈線が施される。11～13は外面に縄文が施される深鉢の胴部片である。

第4節5で述べられるが、放射性炭素年代測定の結果、UMUT130847が加曽利B2式期、UMUT130848が堀之内2式期に相当するとされる。これらの年代と両収納ケースに収納されていた土器は年代的に整合しないことから、人骨に供伴していた可能性は低いと思われる。

4 中央窪地

馬蹄形に展開する貝塚の中央部の標高36.3～36.7mの範囲が中央窪地に相当する。西貝層中央部の標高が最も高くなる部分とは約1.2mの高低差を有する。市道を挟んだ南側も窪地に相当すると考えられるが、市道際に認められる標高36.6～37.5m程の3つの高まりは道路の整地等で近年形成された高まりである。

ここでは中央窪地に設定した5、9、12トレンチについて記述する。

(1) 5 トレンチ (第65・66図)

概要

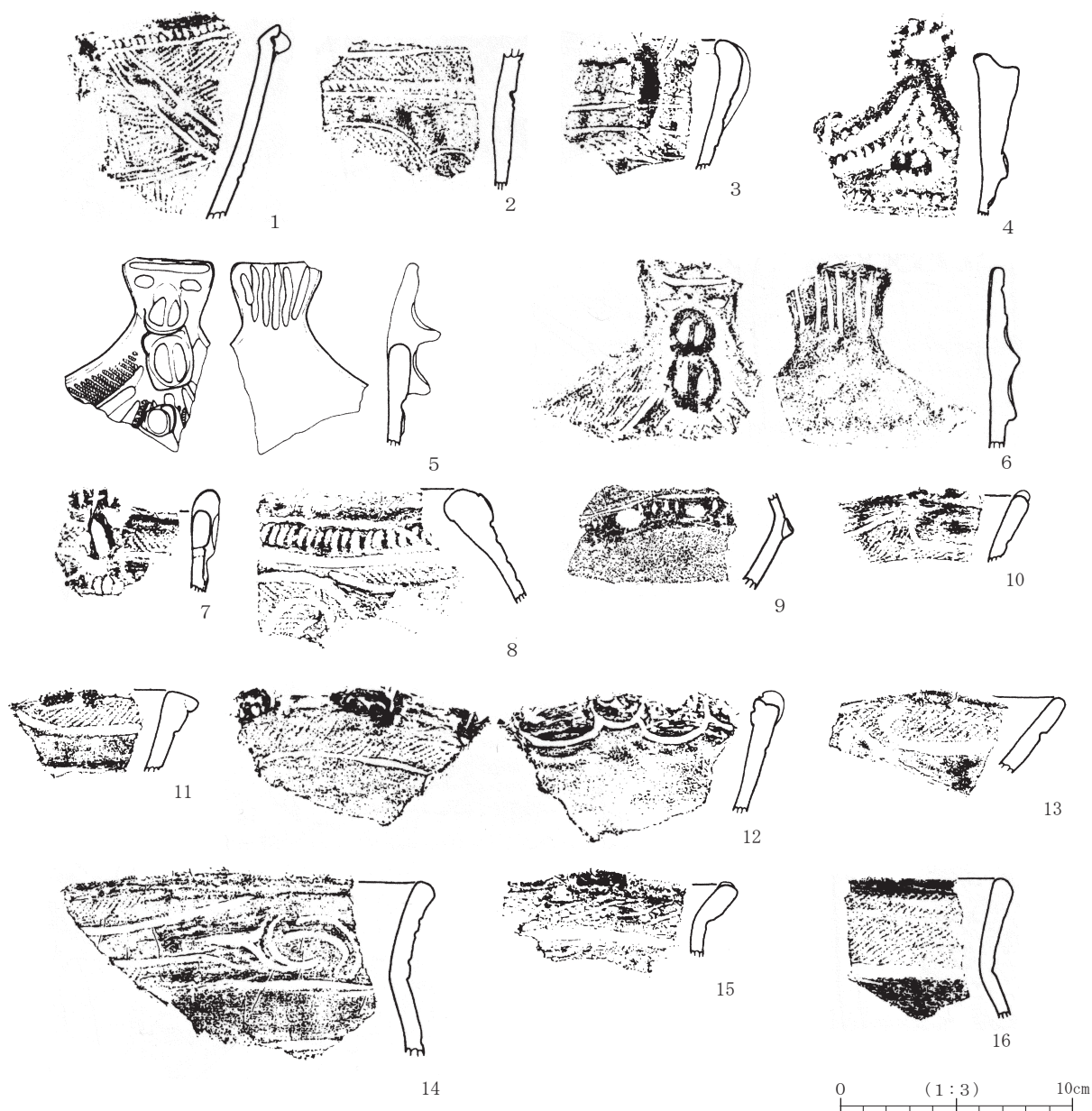
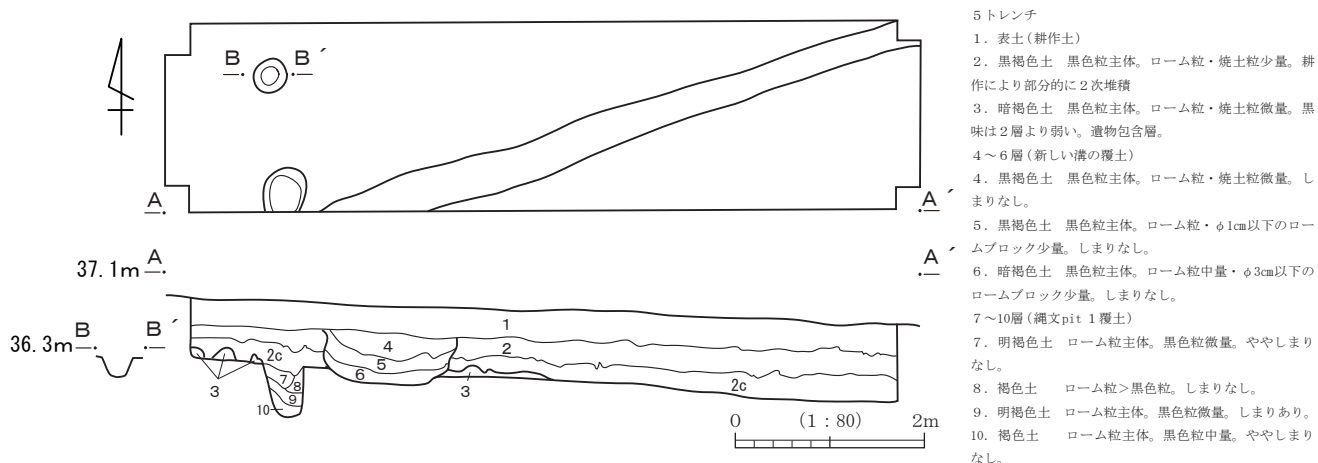
5トレンチは西貝層の中央窪地裾部に東西方向に2×8mの規模で設定した。トレンチの北東から南西方向に新しい時代の溝が検出された。トレンチ西端部では縄文時代の所産と考えられるピットが2基検出された。

層序

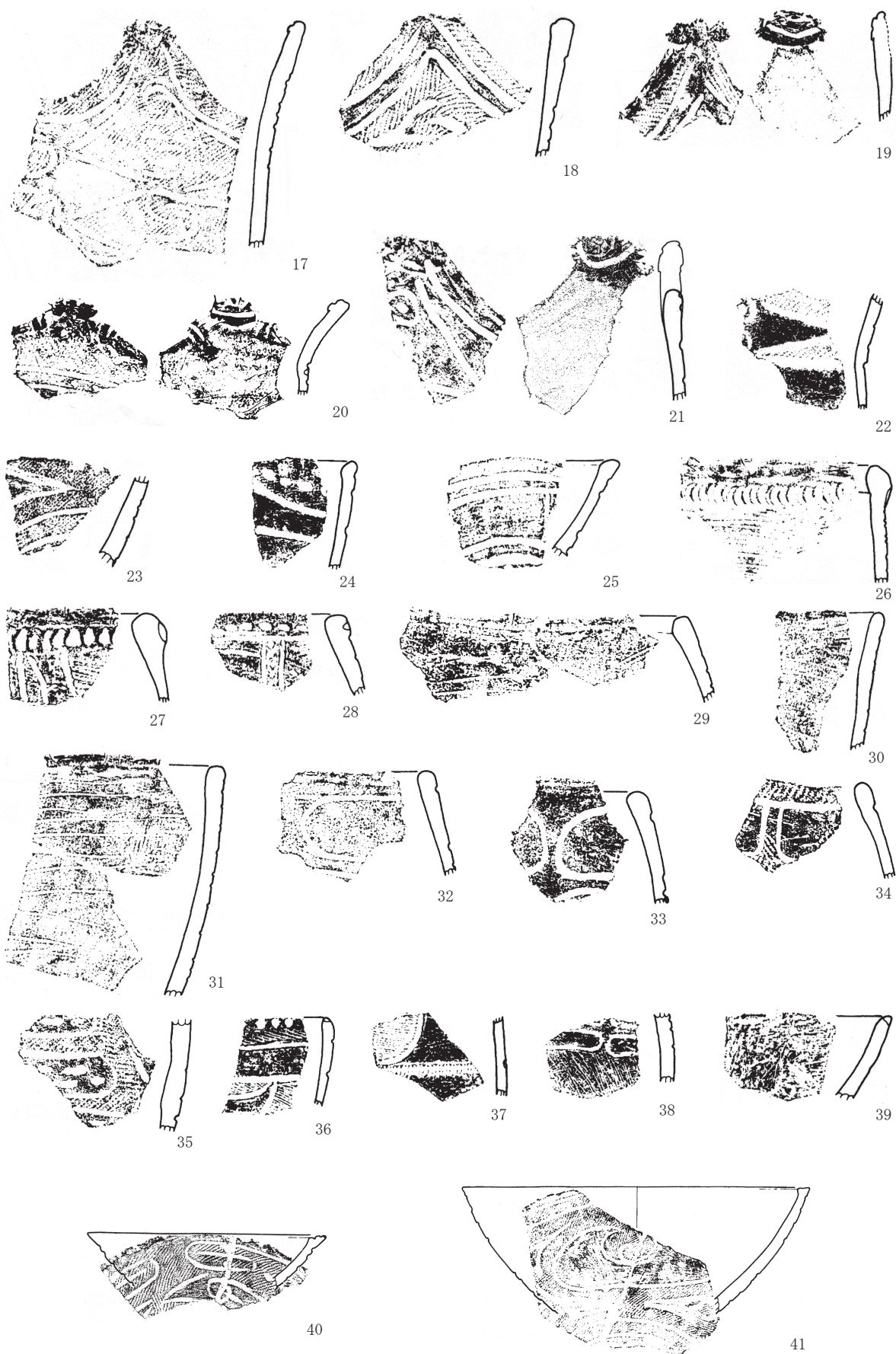
1層耕作土で、2層も耕作の影響を受ける。2c層及び3層が遺物包含層である。

出土遺物

土器出土量は、堀之内1式が144.40g、加曽利B式が940.10g、曾谷式が71.46g、安行1式が571.77g、安行2式が96.75g、安行3a式が389.40g、安行3b式が3,028.29g、大洞BC式が20.00g、前浦式が77.80g、粗製土器が、縄文+紐線文が329.23g、縄文+紐線文+条線文が1,305.47g、紐線文+条線文が981.90g、条線文のみが4680.13g、無文が307.52gである。本遺跡で最も晩期の遺物が多く出土する箇所の一つである。1～3は曾谷式～安行1式と考えられる。4～7は安行2式であろうか。8は後・晩期安行式期の粗製土器と考えられる。9は安行3aであろうか。10～39は安行3b式と考えられる。40、



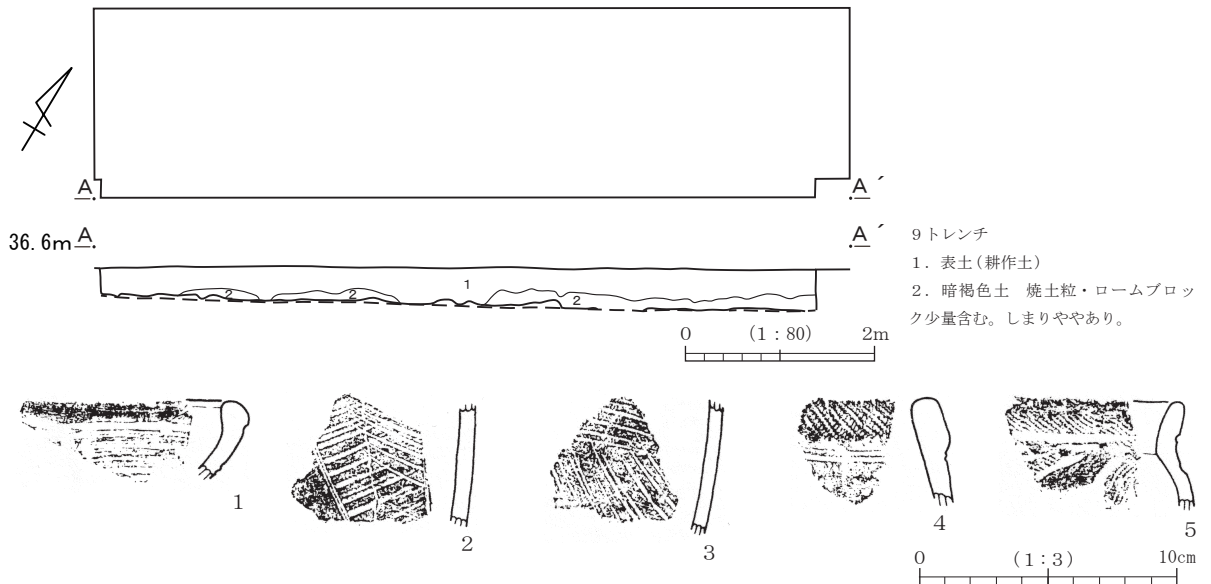
第65図 5 トレンチ遺構配置図、出土土器 (1)



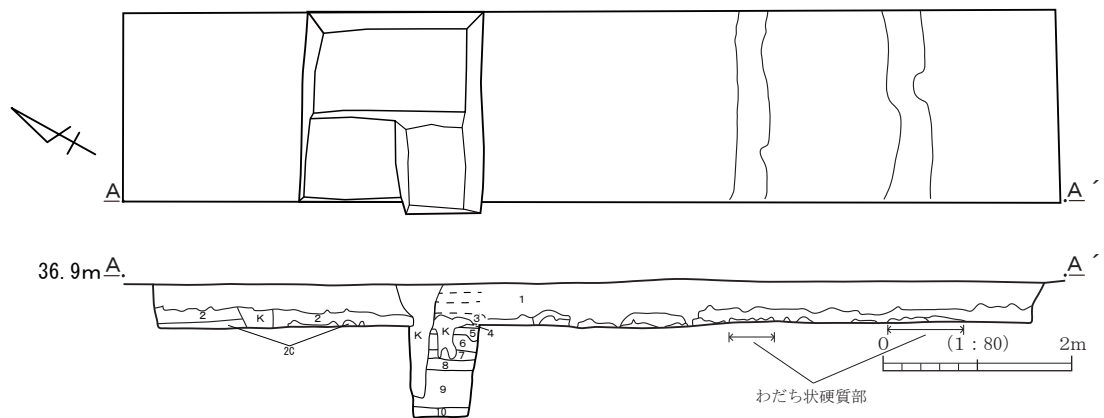
(No.40・41)
 (1:4) 0 10cm
 (1:3) 0 10cm

第66図 5 トレンチ出土土器 (2)

9 トレンチ



第67図 9 トレンチ遺構配置図、出土土器



12T土層説明

1. 暗褐色土 表土。

2. 暗褐色土

2c. 褐色土

3. 黒褐色土 粘性弱、しまり強。ローム粒少量含む。旧表土。

4. 褐色土 粘性弱、しまり強。ローム粒多量に含む。漸移層。

5. 黄褐色土 粘性弱、しまり強。立川ローム層IV層に相当。

ただし、赤色ブロック含まず、ソフト化。

6. 黄褐色土 粘性弱、しまり強。立川ローム層V層に相当。

第1黒色帯。

粘性弱、しまり強。ガラス質粒子含む。

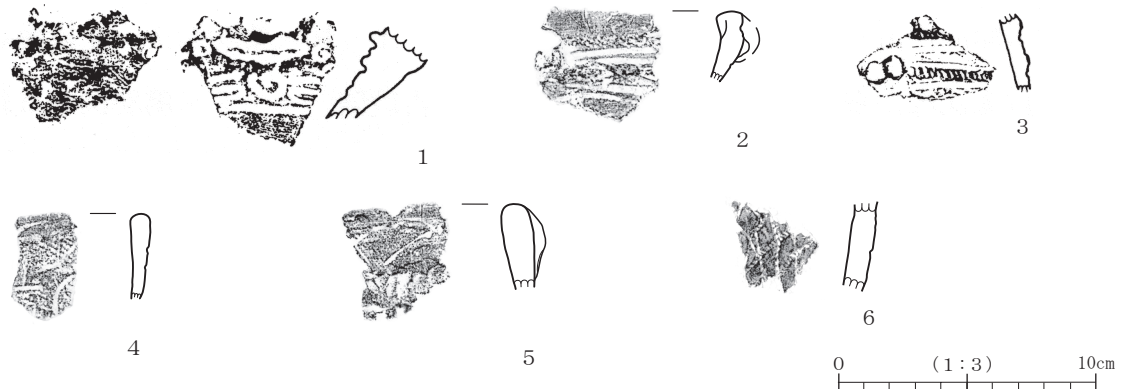
立川ローム層VI層(AT層)に相当。

8. 黄褐色土 粘性強、しまり強。立川ローム層VII層に相当。

9. 黄褐色土 粘性強、しまり強。立川ローム層IX層に相当。

10. 暗黄褐色土 非常によく締まり、水分や多い。

武蔵野ローム層上層か。



第68図 12 トレンチ遺構配置図、出土土器

41 は器形復元できる浅鉢で、40 は大洞C 1、41 は前浦式に相当すると考えられる。土器以外の出土遺物は、土製品が土偶の脚部 1 点（第 77 図 18）、石器が、剥片 3 点、石核 6 点、（第 88 図 18）、楔形石器 1 点（第 88 図 16）、磨製石斧 1 点（第 90 図 34）、磨石 1 点（第 91 図 45）、敲石 5 点、石皿 1 点、石棒 2 点である。

（2） 9 トレンチ（第 67 図）

概要

9 トレンチは中央窪地内に 2 × 8 m の規模で設定したトレンチである。遺構は検出しなかった。

層序

地山ローム付近まで耕作の影響を受けている。

出土遺物

出土土器は、堀之内 1 式 41.06 g、加曽利 B 式 132.04 g、曾谷式 14.61 g、安行 1 式 133.45 g、安行 3 a 式 24.13 g、安行 3 b 式 144.78 g、縄文のみ 33.13 g、縄文＋紐線文 13.96 g、縄文＋紐線文＋条線文 51.79 g、紐線文＋条線文 128.33 g、条線文のみ 90.22 g で、後期後葉～晚期前葉の土器が多く出土する。1 は加曽利 B 式の浅鉢と考えられる。2、3 は条線文のみ施される。4、5 は安行 1 ～安行 3 a と考えられる。土器以外の出土遺物は、土製品が土製円盤 1 点（第 79 図 29）、石器が二次加工ある剥片 2 点、砥石 1 点である。

（3） 12 トレンチ（第 68 図）

概要

12 トレンチは中央窪地内の南側に 2 × 5 m の規模で設定した。平成 4 年の第 2 次調査以降、平成 26 年の第 7 次調査でトレンチの一部を再調査し、中央窪地内の土層堆積の把握を試みた。なお、遺構は検出されなかった。

層序

第 2 次調査では、1 層表土層、2 層暗褐色土、2 c 層褐色土を経てローム層にいたる。第 7 次調査はトレンチの北側の再調査で、1 × 1 m の範囲の地山面をさらに 1.1 m 掘り下げてローム層の土層観察を行った。ローム漸移層である 4 層を 0.25 m ほど掘り下げたところで、A T を含む 7 層に到達した。この 7 層は立川ローム層の VI 層に相当する。隣接する角山遺跡では、平均して漸移層下 0.58 m で VI 層に達しており、近隣の百々目木 B 遺跡や中六遺跡でも漸移層下 0.5 m で VI 層にいたることが確認されている。これらのことから山野貝塚の 12 トレンチにおいては、ローム層上面が 0.2 ～ 0.3 m ほど消失していることが判明した。さらに、VI 層の直上に相当するローム層は本来ハードロームと呼ばれる硬質なローム層となるが、12 トレンチではソフト化していた。

狭小な調査のため不明確ではあるが、12 トレンチを深く掘り下げた結果、立川ローム層の上層 0.25 m ほどが何らかの要因によって消失し、その上面がソフト化していることが分かった。

出土遺物

出土土器は、堀之内 1 式 107.29 g、加曽利 B 式 126.92 g、安行 1 式 106.14 g、安行 2 式 38.08 g、安行 3 a 式 23.98 g、安行 3 b 式 90.96 g、粗製土器は縄文のみ 87.79 g、縄文＋紐線文 23.20 g、縄文＋紐線文＋条線文 16.06 g、紐線文＋条線文 138.09 g、条線文のみ 103.57 g となり、後期後葉以降の土器の割合が高くなる。土器以外の出土遺物は、石器が、二次加工がある剥片 1 点、砥石 1 点である。

5 盛土遺構

本章第1節で述べたように、北東側緩斜面において晩期の遺物を多く含有するローム質黄褐色土を主体とする土層が検出された（11、12層）。このローム質黄褐色土層は縄文時代に自然堆積したものではなく、人為的に移動させられた土が再堆積したものと考えられる。ここでは、この土層について「盛土遺構」として記述する（第9～17図）。

盛土遺構は、M 15、N 15 グリッド、第1次調査範囲のC 94～D 35 グリッドにかけてB～D純貝層に沿いながら、これらの純貝層を被覆する形で斜面側に堆積する。11層は、一見地山ローム層と見誤ってしまうような均質なローム粒子からなる土層で（巻頭カラー図版3）、下部に部分的に獣骨を含む層（14層）が堆積する箇所もある（第11図⑥）。緩斜面に直交する第10図③では、西側の最も厚いところで1.2 m、斜面側の最も標高が低くなるところで0.2 mの厚さとなる。11層の南側の堆積開始部分については、東端のD 35 グリッドは比較的自然に堆積が始まる状況を示すが（第11図⑤）、それ以外のセクション図をみると、D 70 グリッドのように攪乱を受けているところもあるが、C 94、C 97、D 62 グリッドのように掘り込み状を呈する部分もあり（第10図①②、第11図④）、貝層を人為的に掘削した後にローム質黄褐色土が堆積した可能性もある。平面的な広がりを見ると、堆積の南側縁辺は現在の標高36.0～36.3 mの等高線に沿っているようである。北側の範囲は、第1次調査③セクションをみる限り、現在の標高35.6 mよりやや北側まで広がるものと想定される。未調査部分への広がりについて推測することは困難であるが、南側縁辺が斜面の傾斜に沿っていることから、斜面の範囲内で収まるものと考えられる。出土遺物をみると、11層からは堀之内1式期～安行3b式期までの土器が出土するが、後期中葉以降が多くなる。また、晩期安行式期の土器が第1次調査範囲の中で最も多く出土する部分となる。11層下には、部分的に淡黒色を呈する12層が堆積しており、本層からも堀之内1式～安行3b式期までの土器が出土するが、11層に比べ堀之内1式土器が多く出土する傾向にある。

ここでローム質黄褐色土層の供給元を考えると、これらは地山まで掘り込む住居や土坑を掘削した際には必ず生じる土である。また前節の中央窪地で述べたように、ローム層上面の消失が、中央窪地の掘削によるものと考えられるならば、窪地を掘削することによっても生じる土である。これらに由来する土を土器とともに緩斜面に廃棄した可能性も考えられる。なお、12層は淡黒色土を主体とする土層であり、11層に比べ堀之内1式土器の出土が多いことを考え合わせると、本来ローム層の上層に堆積していた旧表土などの黒土を掘削したことに由来する土層の可能性も考えられる。

北東側緩斜面においては、後期前葉から後葉までは、貝を斜面側に廃棄し貝層が形成されてきたが、IV-2段階になると、貝ではなくローム質黄褐色土という土を廃棄しており、後期と晩期により廃棄する対象が明確に異なってくる。第4章第3節で後述するが、時期別の動物遺体の比率を見ると、晩期になると魚類の比率が低下する傾向にある。北東側緩斜面に廃棄する対象が後期から晩期にかけて貝から土に変わったことも山野貝塚における海産資源利用の低調化を示す指標となるだろう。

第3節 出土遺物

本節では、山野貝塚から出土した人工遺物について、遺構、遺構以外に関わらず種類別に記載する。また、現地採集、水洗選別資料を合わせて記載する。土器については個別の属性表と出土位置別の土器重量表をCD-ROMに収録した。土器以外の人工遺物については属性表を掲載するとともにCD-ROMにも収録した。